

会場：21_21 DESIGN SIGHT

2018年2月23日[金]——6月10日[日]

開館時間：10:00-19:00 [入場は18:30まで] | 休館日：火曜日 [5月1日は開館] | 展覧会ディレクター：伊藤俊治

主催：21_21 DESIGN SIGHT、公益財団法人 三宅一生デザイン文化財団 | 会場構成：中原崇志 | グラフィックデザイン：刈谷悠三・角田奈央 [neuchora]

21_21 DESIGN SIGHT ディレクター：三宅一生、佐藤卓、深澤直人 | アソシエイトディレクター：川上典幸子 | プログラム・マネージャー：斎藤朝子

Venue: 21_21 DESIGN SIGHT | 2018.2.23[Fri]——6.10[Sun]

Opening Hours: 10:00-19:00 [Entrance until 18:30] | Closed on Tuesdays [Except May 1] | Exhibition Director: Toshiharu Ito

21_21 DESIGN SIGHT 企画展

21_21 DESIGN SIGHT Exhibition

William Klein and Photographers Living in the 22nd Century

ウィリアム・クラインと22世紀を生きる写真家たち

都

市

NEW
PLANET
PHOTO
CITY

展

写

真



ウィリアム・クライン | 石川直樹 + 森永泰弘

勝又公仁彦 | 沈昭良 | 須藤絢乃

TAKCOM | 多和田有希 | 西野壮平

朴ミナ | 藤原聡志 | 水島貴大 | 安田佐智種

William Klein | Naoki Ishikawa + Yasuhiro Morinaga

Kunihiko Katsumata | Shen Chao-Liang | Ayano Sudo

TAKCOM | Yuki Tawada | Sohei Nishino

Mina Park | Satoshi Fujiwara

Takahiro Mizushima | Sachigusa Yasuda

www.2121designsight.jp

21_21

01. メインビジュアル

21_21 DESIGN SIGHT 企画展

写真都市展

ーウィリアム・クラインと22世紀を生きる写真家たちー

21_21 DESIGN SIGHTでは2018年2月23日より、企画展「写真都市展 ーウィリアム・クラインと22世紀を生きる写真家たちー」を開催します。展覧会ディレクターには、数々の著書や展覧会の企画で知られる写真評論家で美術史家の伊藤俊治を迎えます。

写真が発明されてまもなく2世紀になろうとしています。この200年近くに生み出された写真は天文学的な数に及び、テクノロジーやネットワークの革新とともに、その表現形式や制作手法、つくり手と受け手の関係にも大きな変化がおこっています。

20世紀を代表する写真家 ウィリアム・クラインは、写真、映画、デザイン、ファッションのジャンルを超えた表現と、ニューヨーク、ローマ、モスクワ、東京、パリなどの世界の都市を捉えた作品で、現代の視覚文化に決定的な影響を与えました。

本展では、クラインの都市ヴィジョンとともに、斬新な眼差しで21世紀の都市と人間を見つめ、従来の写真のフレームを大きく飛び越えようとする日本やアジアの写真家たちを紹介します。22世紀をも見据えた未来の写真都市の鼓動を描きだす、ヴィジュアル・コミュニケーションの新しい冒険をご覧ください。



02. ウィリアム・クライン「Self portrait, Paris 1995 (Painted 1995)」

■ ディレクターズ・メッセージ

写真は、もはや地球というスケールを飛び越え、新しい星のようになってしまったのではないのでしょうか。星雲状になった無数の写真の群れがもう一つの惑星のように地球の周りを覆っている。写真が誕生してまもなく2世紀が過ぎようとしています、この間に生み出された写真は天文学的な数に及び、特にデジタル・テクノロジーやネットワーク・メディアの革新が連鎖した20世紀末以降、その膨大なイメージは今は粒子化した圏（スフィア）となり、地上のあらゆる光景を記録するもう一つの次元をつくりだしているかのようです。

この展覧会は20世紀を代表する写真家ウィリアム・クラインの写真を出発点に、20世紀から21世紀へ至る都市ヴィジョンの変貌をかつてないダイナミックな写真の見せ方で提示しようとするものです。

クラインは1956年に写真集『ニューヨーク』で衝撃的なデビューを果たし、その後、ローマ、モスクワ、東京、パリ…と世界を疾走しながら次々と挑発的なイメージを放射し、また写真ばかりではなく映画、絵画、デザイン、ファッションといったジャンルを跨ぎながら現代視覚文化に決定的な影響を与えたスーパースターです。

そのエネルギッシュなクラインの写真を核に、21世紀の都市と人間を見つめ、写真の枠を乗り越えてゆこうとする日本とアジアの若いアーティストたちの野心的な試みを対比させてみたいと思ったのが、この展覧会のきっかけです。

クラインの足跡を辿ると、その軌跡がイメージの巨大な実験場だったことがわかります。ブレボケアレ*といった画像の揺籃、タイポグラフィとイメージの劇的な新結合、都市の底知れない力を浮上させるコラージュ、壁や建築と写真の融合、ガラスの中に宙吊りにされた写真と、様々な視覚実験を繰り返してきました。今ではありふれた展開のように見えますが、当時のクラインが時代と対決しながら挑戦してきた数々の試行は、物質と非物質の狭間で大きく揺れ動くイメージの時代の今こそ、再発見しなければならないもののように思います。

亡くなった日本を代表する思想家の多木浩二さんが指摘したように、クラインの写真は「作品ではなく、“写真の概念”を示す。だから常に新しい」のです。

この展覧会に参加する日本とアジアの若いアーティストたちは、それぞれ独自の想像力と創造性を持ちながら、クラインの写真の記憶と冒険を受け継いでいるように思います。彼らの多元的な表現世界は一つ一つの生きた小惑星であり、現代のヴィジュアル・コミュニケーションの均質性を打ち破る生命力を内包しています。

クラインの『ニューヨーク』はもともとアメリカのどの出版社も引き受けられなかったのですが、パリのスイユ社から「ル・プティ・プラネット（小惑星）」という旅のシリーズ本を編集撮影していたあの偉大な映画監督クリス・マルケルが、この写真集を出版できなければ自分が出版社を辞めるとまで宣言し、ようやく陽の目をみることができました。

「カメラを持って都市に出ると、あらゆるものが私を興奮させる」とクラインは言いましたが、これらの小惑星の集合に秘められた22世紀都市の瞬きや息吹きを感じながら、写真の未来に想いを馳せたいと思います。

伊藤俊治

* ブレボケアレ：対象の動きがブレた不鮮明な写真、ピントがボケた曖昧な写真、荒れた粒子の写真が既存の写真美学を乗り越えるために用いられた。

<見どころ>

1. 「地球から惑星へ」。ニューヨーク、ローマ、モスクワ、東京、パリ…そして惑星へ。地理的、空間的な概念の変容を写真の新たな見せ方で描き出します。
2. ウィリアム・クラインの都市ヴィジョンと、日本・アジアの若手写真家たちの都市ヴィジョンとのダイナミックな対比を明らかにします。
3. 新しいメディアやテクノロジーを駆使した写真表現の可能性を提示します。
4. ジャンルを越境し、人と人を、人と世界を、新たに結びつける 22 世紀のフォト・ヴィジョンを予感させます。
5. オンデマンド出版やインスタグラムなどのネットワークや、アクションカメラやドローンなどの写真世界の拡張による、つくり手と受け手の新しい関係を示します。
6. ウィリアム・クラインの 1950 年代から現在までの写真を通して、都市の希望と熱気を大胆に表象するとともに、これまでの写真の枠組みを多様な方法で飛び越えてゆく写真家たちのエネルギーの行方を捉えます。

■ 展覧会ディレクター



03. 伊藤俊治

伊藤俊治 Toshiharu Ito

多摩美術大学美術学部教授を経て、現在、東京藝術大学美術学部先端芸術表現科教授。芸術、教育、社会活動に多数取り組み、異業種交流のデザインネットワークである東京クリエイティブの設立企画運営、異文化融合と共同創造の実践的教育機関である大阪インターメディアム研究所の企画運営、都市創造型のワークショップスタジオ／東京アート＆アーキテクチャ＆デザイン(ADD)スタジオのディレクション、国際交流基金国際展委員、文化庁芸術文化振興基金審査委員、東京都写真美術館企画運営委員、川崎市民ミュージアム収集委員、相模原市写真芸術祭特別運営委員、彩都国際文化都市企画委員、読売新聞読書委員、NTT インターコミュニケーション・センター・コミッティ、大阪インターメディアム研究所講座統括ディレクター、東京 ADD スタジオのディレクター、2005 年日本万国博覧会デザイン委員会委員長などをつとめる。

主な著書に『写真都市』(冬樹社)、『20 世紀写真史』(筑摩書房)、『ジオラマ論』(リプロポート)、『20 世紀イメージ考古学』(朝日新聞社)、『電子美術論』(NTT 出版)、『情報映像学入門』(オーム社)、『情報メディア学入門』(オーム社) 等多数。

■ 展示内容（展示順）

ウィリアム・クライン

20 世紀を代表する写真家 ウィリアム・クラインの写真と映画、グラフィック、コンタクトプリント、写真集、巨大写真などの多種多様なイメージを一堂に集めて展示。ジャンルを跨いで自由奔放な都市と人間のイメージを展開するクラインの視点を紹介し、本展のイントロダクションとする。

ウィリアム・クライン+TAKCOM

クラインの捉えたニューヨーク、ローマ、モスクワ、東京、パリの各都市を、映像作家 TAKCOM が浮遊感や流動性ととともに、万華鏡や空飛ぶ絨毯のように表現する。200点あまりの写真、タイポグラフィと抽象画像、映画のスティル写真も組み合わせ、ギャラリー 1 の空間全体を使ったマルチ・プロジェクションを行なう。

西野壮平

都市を歩くこと、旅することを通して得た個人的体験をベースに世界の都市という構造体を見つめ、生命が移動することの根源的な意味を探る西野壮平。自身の日々の行為を可視化し、多数の視点から撮影した写真を組み合わせることで、時間や場所が錯綜する架空の視点から見た都市の地図をあぶり出す。細密で力のこもった大判のフォトコラージュを展示。

沈 昭良

台湾を代表する写真家 沈 昭良は、台湾の夜の名物、大型トラックステージを使った台湾綜芸団の生き生きとした情景、トラックの組み立てから撤去までの 24 時間を撮影した高速度撮影映像を組み合わせ、アジアの深い混沌を浮かびあがらせる。カラー写真、高速度撮影映像を組み合わせたフォトインスタレーションで、移動祝祭トラックのエネルギーを表現し、静から動へ、動から静へとダイナミックに流れる特別な時間を生成させる。

水島貴大

水島貴大は、自身の代表的な写真集『Long hug town』から100点以上のカラー写真を、壁一面に展示する。彷徨う都市、夜の東京の路上の狂騒と底知れないエネルギーを全身で写し取る水島の、場所や愛と深く結びついた表現を紹介する。

石川直樹+森永泰弘

写真家 石川直樹とサウンドアーティスト 森永泰弘のコラボレーション・ユニット。ギャラリー 2 の空間に、写真と音の有機的な結合の場を実現。「惑星の光と声」をテーマに、地球を一つの惑星とみなすようなアジアの各都市の騒めきを写真作品とフィールドレコーディングの音像でダイナミックに表現する。

■ 展示内容（展示順）

安田佐智種

視点を天地逆転させるかのように、高所から見下ろした超高層ビル群の写真を放射状に配置して繋ぎ合わせ、
めくるめく都市のヴィジョンを提示する安田佐智種。針や棘のように身体に突き刺さる地勢学的な陶酔へ誘う
シティ・ビューを探求する、デジタル合成写真によるフォトインスタレーションを展示。

多和田有希

人間の精神的な治癒をテーマに、自ら撮影した写真の表面を削り取ったり、燃やしたりする手法で都市や群衆の独特な霊的ヴィジョンを生み出す多和田有希。写真でも絵画でも彫刻でもない、人間の精神の奥底に秘められたものを引きずりだすような作品群は、写真発明時代の魔術的なオーラを放つ。本展では、大判のインクジェットプリントを手作業でスクラッチした「ホワイトアウト」シリーズを中心に展示。

須藤絢乃

多国籍な人間の顔をデジタルで合成した新しいセルフポートレート、絵画と写真を往還するファッション・ポートレート、実在する行方不明の少女を自ら再現する作品で知られる須藤絢乃。自身の代表的な写真集『幻影』と写真集『面影』からのセレクションを展示する。

勝又公仁彦

勝又公仁彦は、光と知覚、装置と現象、内界と外界を横断する独特の繊細な感受性で都市を表象する作品で知られる。「Panning of Days」シリーズ、「Unknown Fire」シリーズ、「Hotel Windows」シリーズ、「Skyline」シリーズなどからセレクション。

朴 ミナ

都市の中の巨大水族館に蠢く集団の熱と呼吸を、ブルーの闇の力とともに鮮やかに活写する新進写真家の朴 ミナ。カラー大判写真と、呼吸音や水の流れる音などを使用したサウンドインスタレーションを行なう。

藤原聡志

藤原聡志は、都市の細部と路上に潜在する人間の無意識的な熱と力を、スーパーリアリズムを思わせる緻密な映像で表現し、写真画像の秘められた可能性を模索する。本展では、「Scanning」シリーズからのセレクションを展示する。

■ プレス画像



04. ウィリアム・クライン「Wings of the Hawk, New York 1955」



05. ウィリアム・クライン「Red Light, Piazzale Flaminio, Rome 1956」



06. ウィリアム・クライン「Kiev, railway station, Moscow 1959」



07. ウィリアム・クライン「Cineposter, Tokyo 1961」

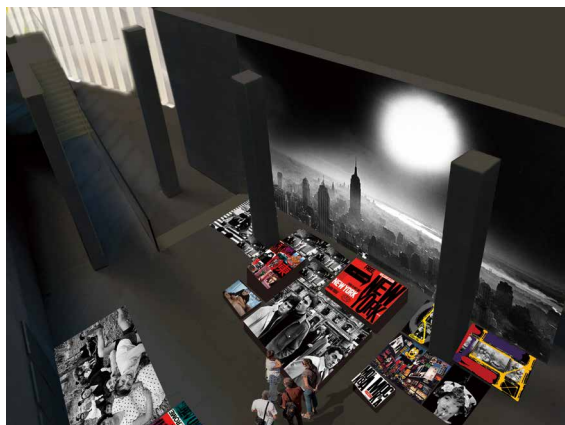


08. ウィリアム・クライン「Le Petit Magot, November 11th, Paris 1968」

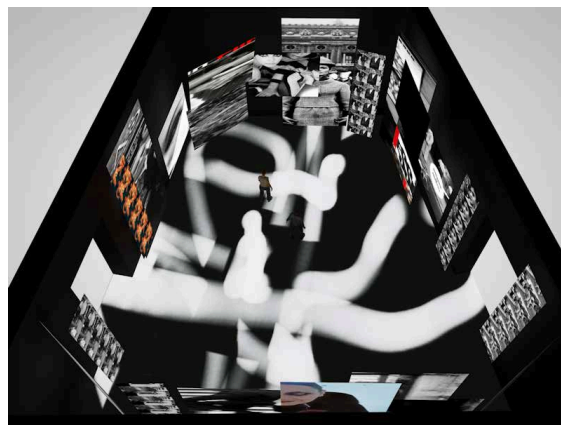


09. ウィリアム・クライン「School Out, Dakar 1963」

■ プレス画像



10. ウィリアム・クライン (ロビー展示イメージ)



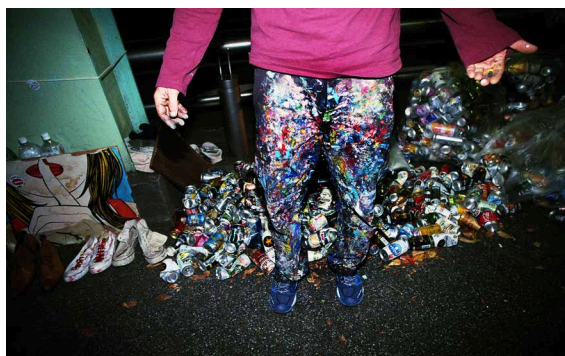
11. ウィリアム・クライン+ TAKCOM (ギャラリー1 展示イメージ)



12. 西野壮平「TOKYO」



13. 沈 昭良「STAGE」

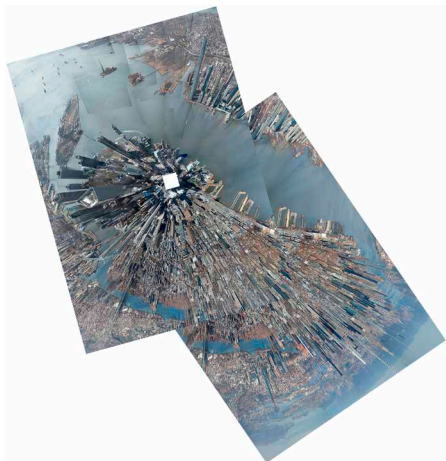


14. 水島貴大「Long hug town」

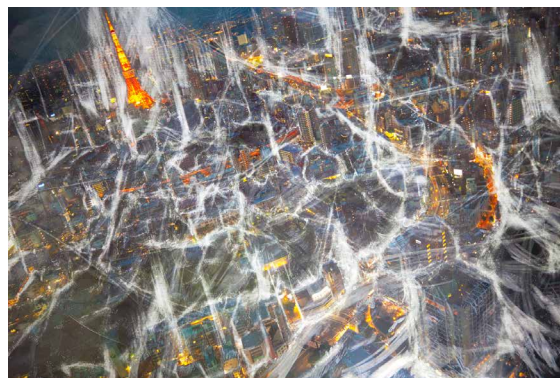


15. 石川直樹「Sundaland 2017」

■ プレス画像



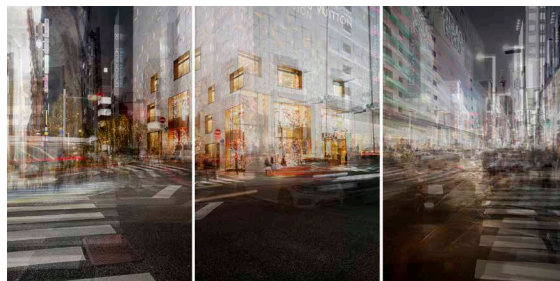
16. 安田佐智種「Aerial #10」



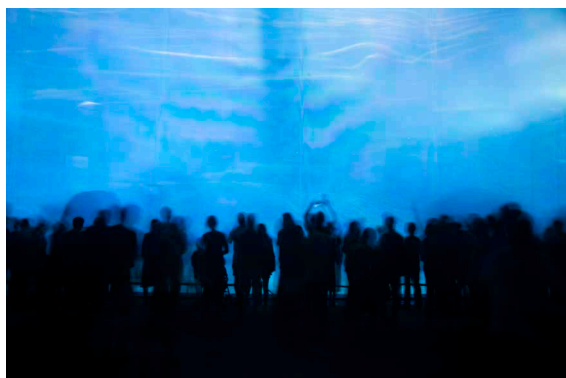
17. 多和田有希「Untitled (Roppongi 2)」



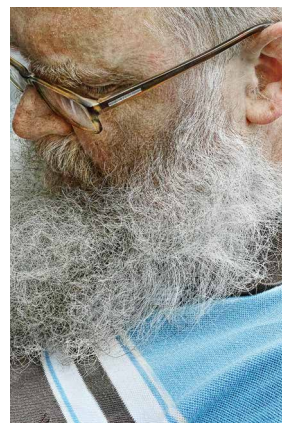
18. 須藤絢乃「Autoscopy」



19. 勝又公仁彦「Panning of Days -Syncretism / Palimpseste-」



20. 朴 ミナ「ブルーの形態」



21. 藤原聡志「Scanning」

■ プロフィール

ウィリアム・クライン William Klein

写真家、画家、映画制作者、そしてグラフィックデザイナーであるウィリアム・クラインは、多くの論争を巻き起こし、大きな影響を残してきたアーティストの一人です。

1928年にニューヨークで生まれた彼は、マンハッタンで育ちました。18歳で大学を終えると、アメリカ軍に入隊。ドイツで6ヶ月間任務に就いた後、仏米の友好プログラムの一環でフランスに渡り、ソルボンヌ大学で1年間学びました。パリで兵役を終えたクラインは、絵画に没頭。短期間、フェルナン・レジェのもとで学んでいたこともあります。その後、ミラノで幾何学的なハードエッジの壁画を制作しました。

1954年ニューヨークへ帰国すると、写真集をつくるという着想を得ました。クラインは故郷に対し、愛憎相半ばする感情を抱いていました。そして彼は、他の芸術の陰に隠れまだ知られていなかった、写真というものが持つ可能性を見いだすのです。正式な写真の教育を受けていなかった彼はタブーを無視した写真を撮りました。その作品には、広角、粗さ、激しいコントラスト、偶然生まれた効果や普通では用いられない特異なフレーミングが使用されています。その結果、彼の最初の写真集『Life Is Good & Good for You in New York: Trance Witness Revels』（邦題『ニューヨーク』）が生まれたのです。それはまさに、ダイナミズムと卓抜した激しさを兼ね備えたものでした。1956年にパリ、ロンドン、ローマで出版されたこの本は、ニューヨークでは出版されませんでした。アメリカではこの作品は、あまりに暴力的で、気分の良いものではないと受け取られたのです。クラインはフランスでナダール賞を受賞しました。この成功に伴い、世界の他の大都市をテーマにした本が出版されました。1956年に撮影した写真が掲載された『ローマ』、1959年から1961年の写真を使用した『モスクワ』、1961年の『東京』。そして、2000年から2002年にかけて撮影された写真を主に使用した『パリ』。これらは写真の世界でベストセラーになりました。

1958年、クラインは初めてのポップ映画「Broadway By Light」（邦題「光のブロードウェイ」）を撮影しました。そして1960年代半ばには、写真撮影をやめて映画に専念するようになり、約20のドキュメンタリー映画、長編映画、フィクション映画の撮影を行いました。代表作に、「Muhammed Ali, The Greatest」（邦題「モハメド・アリ／ザ・グレートスト」、1964年-1974年）、「The Little Richard Story」（1980年）、「Grands soirs et petits matins」（邦題「革命の夜、いつもの朝」、1968年）、「Qui êtes-vous, Polly Maggoo?」（邦題「ポリー・マギーお前は誰だ?」、1967年／ジャン・ヴィゴ賞受賞）、「Mr. Freedom」（邦題「ミスター・フリーダム」、1968年）、私たちの時代のイデオロギー神話への痛烈な皮肉を込めた寓話「Le Couple témoin」（邦題「モデルカップル」、1977年）、「The French」（1981年）、「Le Messie」（2000年）があります。

1980年代に入るとクラインは再び写真撮影を始め、世界中で展覧会を行ったり、『Close Up』（1989年）、『Mode In & Out』（1994年）、『ニューヨーク』（1995年）の新版など数多くの本を出版したりしました。『ローマ』の新版、『Rome+Klein』（2009年）も出版されました。2008年には、拡大したコンタクトプリントの上に色を塗るという新しい解釈を加えた写真選集を出版。2012年には、彼の最初の抽象画や絵画作品が収録された『Paintings etc.』、続いて2015年には『Black and Light』が出版されました。

クラインは多くの賞を受賞しました。フランス国内のグランプリを始めとして、芸術と文学におけるレジオンドヌールのコマンドゥールも受賞しています。英国王立写真協会のセンテナリー・メダル、スウェーデンのハッセルブラッド基金国際写真賞受賞。ニューヨークの米国芸術協会および国際写真センターからも、彼の功績全体に対して賞が贈られています。リエージュ大学からは名誉博士号が授与されています。

2005年12月、ポンピドゥー・センターにて彼の作品の大規模な回顧展が開かれ、400ページの本、『Rétrospective』が共同出版されました。2012年にはロンドンのテート・モダンにて「William Klein + Daido Moriyama」展が開催されました。以後、2013年にはアムステルダム の FOAM 写真美術館にて、2016年にはルーアンのサントゥアン修道院およびミラノ裁判所にて展覧会が、同じく2016年イェールにて「William Klein + Polly Maggoo」展が、2017年にはC/O ベルリンにて「Films & Photographs」展が開催されました。

ウィリアム・クラインの作品は写真の歴史に足跡を残し、二世代にわたる写真家や映画製作者に影響を与えました。彼は、ヨーロッパ中そして世界中で展覧会を開催し続けています。



21. 石川直樹

石川直樹 Naoki Ishikawa

1977年東京生まれ。写真家。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。人類学、民俗学などの領域に関心を持ち、辺境から都市まであらゆる場所を旅しながら、作品を発表し続けている。『NEW DIMENSION』（赤々舎）、『POLAR』（リトルモア）により、日本写真協会新人賞、講談社出版文化賞。『CORONA』（青土社）により土門拳賞を受賞。著書に、開高健ノンフィクション賞を受賞した『最後の冒険家』（集英社）ほか多数。最新刊に写真集『知床半島』（北海道新聞社）、『Svalbard』（SUPER LABO）など。千葉・市原湖畔美術館にて個展『この星の光の地図を写す』開催中（～2017年12月28日）。2018年3月より、高知県立美術館に巡回予定。



22. 勝又公仁彦

勝又公仁彦 Kunihiko Katsumata

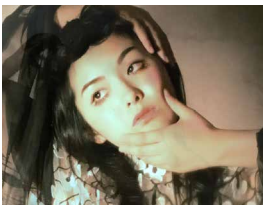
早稲田大学法学部卒業、インターメディアム研究所修了。在学中より文芸、絵画、写真、映像などの作品制作を始める。国内外で様々な職業に従事した後、作品発表を開始。インスタレーションから出発し、現在では写真を中心とした映像メディアで作品を制作。多様な被写体のもとで「時間」「光」「場所」「空間」などをサブテーマに、常に写真と映像の構造に触れる作品を展開。日常の中に現象しながらも知覚される事の無かった世界を掘り取ることで、観る者を新たな認識へと誘うとともに、歴史・社会・文明への批評的な暗喩を込めた作品展開を続けている。



23. 沈昭良

沈昭良 Shen Chao-Liang

1968年、台湾台南生まれ。台湾芸術大学応用メディア芸術修士。自由時報写真部カメラマン、副チーフカメラマン、中央大学客員芸術家を歴任、現在台北国際当代芸術博覧会（Young Art Taipei）においてPortfolio Reviewの呼びかけ人を務める。1993年より、いくつかのテーマに絞り込んで、被写体を追いかけてきた。2001年に初めての写真集『映像・南方澳』を発表。その後次々と、『玉蘭』（2008）、『築地魚市場』（2010）、『STAGE』（2011）、『SINGERS & STAGES』（2013）、『台湾綜芸団』などの長編写真集を出版。その豊かで繊細なドキュメンタリー写真のスタイル、写真集制作における謹厳な態度は、多くの同業者・専門家に高く評価されている。



24. 須藤絢乃

須藤絢乃 Ayano Sudo

あの世とこの世、あなたと私、男と女。それらの境界が揺らぐ様を肖像写真という形で表現してきた須藤絢乃の作品はグリッターやラインストーンで飾られ、その輝きは時に過剰に、時につつましく鑑賞者を作品の世界に引き込み、次第に作者と他者の境界を失ってゆく。「作品に写る彼等は一体誰なのか。」という感覚が生まれると同時に「自己」という存在を感じざるを得ない、新たな装置としてのセルフポートレートを製作している。京都市立芸術大学大学院修了、2014年キヤノン写真新世紀グランプリ、国内外の展覧会やアートフェア、エディトリアルなどで活動中。



25. TAKCOM

TAKCOM

映像作家。CM、MVなど広告映像を手がける傍、実験的なショートフィルム、映像インスタレーションなどを手掛ける。近年の作品として、ショートフィルム「Pessim」Top shortsにてBest experimental他。「Noah flaw」はNownessにてフィーチャー、SIGGRAPH Asia、オーバーハウゼン国際短編映画祭他、十カ国以上の映画祭で選出他。Nosaj Thing「Cold Stares」(映像演出担当) Prix Ars Electronica 2016にてAward of Distinction受賞、Vienna Independent Shortsにてthe best international music video受賞他。「森ビル 六本木ヒルズ -TOKYO CITY SYMPHONY」(映像演出担当)カンヌライオンズ国際クリエイティビティ・フェスティバルCyber部門 SILVER受賞、ADFEST PROMO LOTUS/GOLD 賞、D&AD AWARD Yellow Pencil 受賞等。



26. 多和田有希

多和田有希 Yuki Tawada

1978年浜松市出身。自ら撮影した写真を消す(削る、燃やすなど)という行為を通し、都市や群衆の集合的無意識や個の意識変容をイメージとして湧出させる。美術博士(東京藝術大学)、農学学士(東北大学)。近年の展覧会に「あざみ野フォト・アニュアル 写真の境界」(2014年・横浜市民ギャラリーあざみ野)、「5x3」(2015年・Kunstraum Düsseldorf、デュッセルドルフ)、「カミナリとアート光 / 電気 / 神さま」(2017年・群馬県立館林美術館)など。2017年滝沢広との共著で写真集「Dual/ I am in You」を刊行。



27. 西野壮平

西野壮平 Sohei Nishino

1982年、兵庫生まれ。歩くこと、旅を通して得た個人的体験をもとに作品を制作している。2013年にNYの国際写真センター(ICP)のトリエンナーレ『A Different Kind of Order』、オランダの『Foam』誌が選ぶFoam Talent 2013に選出される他、2016年にはサンフランシスコ近代美術館(SFMOMA)にて個展を開催。現在第7回 Prix Pictet「SPACE」の最終ノミネート作家に選出され、世界中の約13会場を巡回中の他、2018年1月にはイタリアのMAST Foundationにてグループ展に参加予定。



28. 朴 ミナ

朴 ミナ Mina Park

1989年 韓国、大邱(テグ)生まれ。2013年 中央大学(韓国)芸術学部写真専攻卒業。現在、東京藝術大学大学院美術研究科修士課程在籍。2013年、Republic of Korea Culture & Content Agency galleryにて個展「In the dead」を開催。2011年より、韓国、日本にて多数のグループ展やプロジェクトに参加するほか、2014年より、清里フォトアートミュージアムに「In the dead」、「White out」のシリーズが所蔵されている。



29. 藤原聡志

藤原聡志 Satoshi Fujiwara

1984年、兵庫県生まれ。2007年、大阪芸術大学芸術学部卒業。卒業後は東京でグラフィックデザイナーとして働くが、2012年に拠点をベルリンに移し、独学で写真を始める。2017年、個展「EU」をイタリア・ミラノのプラダ財団による展示施設オッセルヴァトリオ (Osservatorio) で開催。また2016年には、ドイツのオペラハウスからの要請を受け、ベルリン市内のさまざまな空間で、写真によるインスタレーションを発表した。同オペラハウスで個展も開催。2018年、ベルギー・リエージュ近代美術館で行なわれるビエンナーレ Biennale de l'Image Possible に参加予定。



30. 水島貴大

水島貴大 Takahiro Mizushima

1988年 東京都出身。東京ビジュアルアーツ卒業。2009年の初個展、「東京ロンリーハートランド」より写真家として活動。2014年に株式会社リクルートが運営するギャラリー「ガーディアン・ガーデン」(東京都中央区銀座) 主催による公募展、1_WALLにてファイナリスト選出。2016年よりインデペンデントギャラリー、TOTEM POLE PHOTO GALLERYのメンバーとして写真展を中心とした活動を開始。2017年、作品「Long hug town」でヤングアート台北フォトアイのグランプリを受賞。人々の群像からもたらされるイメージに向かって歩み続けている。



31. 森永泰弘

森永泰弘 Yasuhiro Morinaga

サウンドデザイナー。東京藝術大学大学院を経て、映画理論家 / 作曲家のミシェル・シオンに師事するため渡仏。帰国後は世界各地を旅しながら少数民族の音楽や儀礼などの記録を中心に創作活動を行なっている。また国内外のアーティストとのコラボレーションも意欲的に取り組んでおり、映画・舞台芸術・インスタレーションなどジャンル横断的な活動を展開している。



32. 安田佐智種

安田佐智種 Sachigusa Yasuda

1968年東京都出身。ニューヨーク在住。視覚と身体の記憶の関係性を追求し、身体感覚を通して世界を解釈する可能性の拡張を試みている。訪れた都市や場所、空間における、歩く、見回すといった日常の所作や、そこで得られる触覚的、歴史的な情報、交流した人の記憶等を手掛かりに、写真、ビデオ、インスタレーションなどの方法で制作する。2013年以降、福島県立博物館が事務局をつとめる「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」に参加し、取材に基づいた作品シリーズを展開している。近年の主な展示に「Mother/Land」小山市立車屋美術館 (2014年)、「DOMANI・明日」新国立美術館 (2009年) など。

■ 開催概要

21_21 DESIGN SIGHT 企画展「写真都市展 -ウィリアム・クラインと 22 世紀を生きる写真家たち-」

会期	2018 年 2 月 23 日 (金) - 6 月 10 日 (日)
休館日	火曜日 (5 月 1 日は開館)
開館時間	10:00 - 19:00 (入場は 18:30 まで)
入館料	一般 1,100 円、大学生 800 円、高校生 500 円、中学生以下無料
会場	21_21 DESIGN SIGHT ギャラリー 1、2 〒107-0052 東京都港区赤坂 9-7-6 東京ミッドタウン ミッドタウン・ガーデン tel. 03-3475-2121 www.2121designsight.jp
アクセス	都営地下鉄大江戸線「六本木」駅 東京メトロ日比谷線「六本木」駅 東京メトロ千代田線「乃木坂」駅より徒歩 5 分
主催	21_21 DESIGN SIGHT、公益財団法人 三宅一生デザイン文化財団
特別協賛	三井不動産株式会社
展覧会ディレクター	伊藤俊治
会場構成	中原崇志
グラフィックデザイン	刈谷悠三 + 角田奈央 (neucitora)
参加作家	ウィリアム・クライン、石川直樹+森永泰弘、勝又公仁彦、沈 昭良、須藤絢乃、TAKCOM、多和田有希、 西野壮平、朴 ミナ、藤原聡志、水島貴大、安田佐智種
21_21 DESIGN SIGHT ディレクター	三宅一生、佐藤 卓、深澤直人
アソシエイトディレクター	川上典李子
プログラム・マネージャー	齋藤朝子

■ 関連イベント

- オープニングトーク「沈 昭良の写真について、アジアの写真の特性について」
2018年2月24日(土) 14:00-15:30 出演：沈 昭良、伊藤俊治
- トーク「テクノロジーと表現」
2018年3月17日(土) 14:00-15:30 出演：ドミニク・チェン、TAKCOM、他
- トーク「現代美術と現代写真」
2018年5月26日(土) 17:00-18:30 出演：榎木野衣、伊藤俊治

*会場：21_21 DESIGN SIGHT/参加費・参加方法は、21_21 DESIGN SIGHT ウェブサイトをご覧ください

*この他にも開催期間中、多数のイベントを企画しております

■ プレスレビュー

2018 年 2 月 22 日 (木)